

11・2日比谷野音へ!

全学連(斎藤郁真委員長) 書記局通信

2014年10月29日
No.243

Tel 03-3651-4861
mail_cn001@zengakuren.jp
<http://www.zengakuren.jp/>

10・21 国際反戦デー感想②

●首都圏大学・K

今回初めて10・21国際反戦デーに参加して、私が考えたこと・思ったことについて述べたいと思う。

まず第1は、警察権力による弾圧のすさまじさである。これまでも警察権力による弾圧の様子は見てきていたが、それとは一線を画すような、次元の違う弾圧体制であるように思われた。「警察権力がまったく怖くない」と断言することは今の私にはできないが、あの弾圧体制を見て感じたことがある。それは、「正義はどちらにあるのか」ということである。よく考えてみてほしい。私たちの人数はさほど多くない。人数的に考えれば、「放っておいても大丈夫な勢力(例:日本共産党)」と言うこともできる。しかし実際には、大量の警察権力による監視と弾圧の体制が敷かれている。この事実が意味することは何か。要は、彼らは私たちの力を恐れているのである。そうでもなければ、あのような弾圧体制を敷くことはできない。私たちのことを「気にも留めない」のであれば、そもそも監視する必要などないからである。あの弾圧体制こそが、私たちのなかに社会を変革する力があることを如実に物語っていると言えるだろう。そういう意味で言えば、私たちはすでに警察権力よりも勝利しているのではないか。

第2に、今政府が行っている、あるいはやろうとしている諸々の改革が、いかにデタラメかということがはっきりしたと思う。私は今回、政府による戦争政策策動(武器輸出解禁、集団的自衛権の行使容認など)を許すことができず、行動に参加した。その戦争政策のなかには、大学(教育)も含まれていると考えてよいだろう。「スーパーグローバル

大学」なるものが指定され、学生を資本の金儲けの「金ヅル」にしていくわけである。あるいは、教育委員会を「改革」し、自分たちに都合の悪い人間や意見が台頭してこないように未然に防止するわけである。このままいけば、日本は本当に「戦争をする国」になってしまう。私たちは、未来の子どもたちに、そのような社会や世界を残してしまっていないのか。断じて「否」である。そのためにも、今ここで、なんとしても、軍事・教育を牛耳る政府やブルジョワジー勢力を打倒しておかなければならない。いわゆる「リベラル」と呼ばれる人々は、あくまでも体制内改良主義にこだわるが、そもそも、その体制自体が腐っているわけであるから、腐った体制を「改良」しても、腐敗の根本的根絶にはならないのである。日本共産党などの既成左翼も同じであるが、彼らがより悪意に満ちている点として、人々の期待を集めておきながら、それを選挙目的や組織維持の目的にしか利用しないということが挙げられる。今回の行動は、こういった体制内の動きに対して鉄拳をたたきつけ、打撃を与えるという意味でも、非常に重要な行動であったと認識している。

第3に、私たち自身の問題について触れておきたい。今回の行動を通し、様々な到達地平が切り拓かれたと思うが、同時にそれは新たな課題の発見にもつながるものだと認識しておかなければならないのではないか。「いかに仲間を増やすのか」この点が重要であるように思う。ここで気を付けなければいけないことは、増やすのは「支持者」ではなく「仲間」であるという点である。各自の日々の実践や議論をとおして生まれた団結こそが、必要ではないか。「支持者」がいるのはもちろん結構なことではあるが、そ

11・2全国労働者総決起集会

世界の労働者と団結し、戦争と民営化の道を許すな!

今こそ闘う労働組合を全国の職場に!

11月2日(日) 正午 東京・日比谷野外音楽堂



【呼びかけ】全日本建設運輸連帯労働組合関西地区生コン支部、全国金属機械労働組合港合同、国鉄千葉動力車労働組合

れだけでは日本共産党などと同じになってしまうと考える。彼らの最終目的は「選挙に勝つこと」であって、「真に人間的な共同社会を建設すること」ではない。私たちは、「支持を集める」のではなく、議論や討論をとおして団結を固めた上に、「仲間を集める」ということを目指す必要があるのではないか。無論、これは一朝一夕で達成できるものではなく、かなりの困難を極めることは自明である。「何をバカな」と思われるかもしれない。しかし、「千里の道も一歩から」と言われるように、やらなければ何も始まらない。何もしないで動かないままだと、私たちは、政府やブルジョワジーによる攻撃に対して、ただ受け身的になる他ない。それではいけない。彼らは待ってはくれないのである。少なくともこのことに確信を持ち、今後の活動に取り組んでいきたいと思う。

私たち大人は子どもたちに言う。「人をいじめてはいけません」「人を殺してはいけません」「人を傷つけてはいけません」「みんなと仲良くしましょう」しかし今、イラク・シリアで、インド・パキスタンで、パレスチナで、ウクライナで、アフリカで、全世界で、戦争(人殺し)の嵐が吹き荒れている。この現状を見たとき、子どもたちは私たち大人に問い返すだろう。「そうは言うけど、大人たち自身が人殺しをしているではないか。どんな理由をもってそんなことを言うのか」私たちは今、この純粋な問いかけに対する回答を持ち合わせていない。これ以上、全世界の人々を、子どもたちを虐げる世界を維持してはならない。結局のところ「資本主義・帝国主義を打倒せよ」という話になるのであるが、ただ教条的に言うのではなく、日々の生活や実践をとおして、私たち自身が、資本主義・帝国主義を打倒することのできる力を身につけていくことが必要であるように思う。

●沖縄大学生自治会委員長・赤嶺知晃

私たちの目の前で戦争が始まっている時代です。日米安保ガイドライン改定の中間報告が出され、東アジアでの戦争が位置づけられ、辺野古基地建設も東アジアでの戦争政策の一つとして進められています。戦争のための辺野古基地建設と大学の戦争協力を阻止するために沖縄から10・21国際反戦デー闘争に駆けつけました。

10・21は、法大デモ・国会デモ・渋谷デモと1日に3回デモが行われるハードな闘争でした。しかし、全てのデモ

に飛び入りの参加者がいたり、圧倒的な街頭からの注目と支持があったり、人々の怒りが充満している情勢と、職場・キャンパスから戦争を止めていく展望を掴みました！

特に、法大デモは、デモ出発前の法大当局への申し入れ書提出の段階から当局との激突になり、多くの法大生の注目のなかで闘い抜かれました。法大当局は、当日も工事による正門と外濠校舎門の封鎖を行い、弾圧職員を配置して厳戒態勢をしいてきました。しかし、多くの法大生が厳戒態勢のなかで外に出てきて申し入れ行動の様子を見に来ました。

法大文化連盟委員長・武田雄飛丸君が、「学内での規制強化は戦争協力の問題と一体であり、リベラルな立場を取りながら学生の決起を潰し、大学改革を進める法大・田中優子は、安倍の先兵である」と徹底弾劾。「学生の団結した力で大学の現実を変えよう」と訴えました。

この訴えに対し、法大当局は、文化連盟の申し入れ書の受け取り拒否で答えてきました。学生の声は一切無視する法大の実態が多くの法大生の前で明らかになりました。この直後の全学連副委員長・作部洋平君の「大学の戦争協力が問題になるなかで、学生なんて声をあげるような存在じゃないってされているのがこの現実だ」「文化連盟と一緒に闘おう！…ビラを撒いたら逮捕されるクソみたいな大学を変えよう！」という熱い訴えに集会を見ていた法大生も共感し、一気に力関係を変えるものになりました。そして、デモに出る際には、拍手でデモを送り出す法大生が何人かいました。この熱気のなかで、公安警察も申し入れ行動に一切ふれることができず、デモは大成功しました！法大・田中優子のようなエセリベラルのペテンを、学生が注目するなか、申し入れ書提出という実践で暴き出すことができたのは、良かったです。

国会デモ・渋谷デモでは、多くの労働者が立ち止まり、「学生がんばれ」の声をかけてくれました。今は「がんばれ」と応援する立場ですが、小竹運輸労組の野沢副委員長が法大デモに来てくれたように、学生の戦争協力阻止の闘いが労働者の巨大な政治決起に火をつけることができると実感しました。

この10・21闘争を、具体的に戦争を止める闘いにしていくのは、職場・キャンパスの闘いの発展にあります。そのためにも、11・2労働者総決起集会が重要です。沖大学生自治会も多くの沖大生の仲間と参加します！

【当面する行動方針】

●武田雄飛丸君「無期停学処分」撤回裁判・第7回弁論

11月5日(水) 13時半～ 東京地裁705号法廷にて

●武田雄飛丸君「暴行」でっち上げ裁判・第3回公判

11月7日(金) 13時半～ 東京地裁429号法廷にて

※傍聴券配布のため、13時までに裁判所入口脇に集合してください。

